残りの者 シャーアル

石巻祈りの家NEWS LETTER 「シャーアル」(128号)
986-0801　宮城県石巻市水明北３丁目13番28号
TEL /0225-96-1497　Email/ hjm-ja2@yg8.so-net.ne.jp
振替口座　02290-6-126186　口座名称　阿部　一
●代表／阿部　一　　●副代表／菊池せい子

信仰：あなたはしあわせですか？

● あの猛暑を忘れたかのように朝夕の寒さにビックリする季節になりました。皆さんにはお変わりございませんか。
● 神の憐れみと皆さんの支えによって、10/14にこの小さな「石巻祈りの家」が地域の教会の牧師や兄姉50名余を迎えて10周年の感謝会を行うことが出来ました。
● 信徒だけの牧師もいないこの群が地域の教会として10年間も主のしもべとして歩めたことは奇蹟に近いものです。振り返って、神と皆さまに頂いてきた励ましとご愛に改めて感謝しております。
● イスラエルの歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリの「サピエンス全史」を読み、改めて「幸せ」とは何かを問われました。
● 人間の長い歴史は、常にこの「幸せ」を求めてきた歩みであり、その希求の中で、より幸せでありたいと「意識革命」を経て、「農業革命」、「産業革命」、そして今や「AT革命」の時代に入ってきました。
● 生活は加速度的に便利になり、ものが溢れ、医薬の進歩で高齢化の社会となりました。2040年πには人工頭脳が人間を超えると言われています。その陰で、異常気象の原因と言われる自然破壊、貧富の格差が進み、今や餓死する人数よりもメタボで死ぬ人の数の方が多くなったと報じられています。
● しかし、わたしたちは豊かで幸せなことは、お金やものを沢山持っていること、社会的な高い地位にあることなどの周りとの比較において優位を保つことであるという価値観に支配されています。
● 「しあわせ」の感じ方は、その環境にかかわらず一人一人で異なります。「幸せ」、「happy、 fortune」はどちらかというと思いがけず起こった(happen) 幸運の一時的なものであり、一方「福」、「bless」は神から与えられる恵みの意味があることを辞書を調べて知りました。
● さらに、英語の「bless」は言語的には「いけにえの血で清める」からできた言葉で、神からの聖別、祝福の意味であると説明されています。クリスチャンが良く用いる「God bless you」という表現は、本当の幸せは神から与えられるものだということを知って用いているのです。
● 旧約聖書にはこの「しあわせ」という言葉が沢山出てきます。その多くは「主が命じられた全ての道を歩む」であると表現されています。自分で獲得する富や名誉ではなく、「神の祝福」こそ最も幸いなことだということです。
● さらに、新約聖書では有名な山上の垂訓でイエスの八福の教では「 Belssed are the poor・・」のように、幸いは獲得するものではなく与えられるものと表されています。イエスのその教えは、ある意味ではこの社会の価値観とは全く逆なものですがそこに深い真理が隠されており、神と歩む人生こそどんな状況でも真の幸せであることを教えています。
● 「世の終わりまであなた方と共にいる」という主の言葉を信じ、こんな者を愛し続けてくださる神に感謝してこの月も謙遜に歩みたいと思います。皆さんの上に神の祝福を！。

■ 先月の多くの恵みから

❶ 10/14の午後に、私たちの小さな群を10年間も支えて下さった神と地域教会および信徒に感謝を表す「**開所十周年記念感謝会**」を石巻クリスチャンセンターで50余名の出席者を得て開くことができました。このために多くの方からご祝儀や菓子などを送って頂き、その会を盛会にさせて頂きました。
❷ 阿部の導いた教え子の葬儀に出席するために酒田に運転が守られて出かけて来ることができました。酒田ルーテル同胞教会の安藤牧師と教会員の主にあるご配慮に感謝しました。

❸ 10/20の地元紙「**石巻日々新聞**」の紙面半分の「わ・わ・わ」の欄に群の「**楽しい手芸の会**」の活動が紹介されました。
❸ 10/17に、石巻オアシス教会で市内の教会リーダーと信徒が共に「**ゆるすこと・祝福すること**」についての学び会の第7回目が川上直哉師の指導で持たれ、今回は「**教誨師と支倉常長**」という主題で映画「教誨師」の働きと遠藤周作の小説「**侍**」の最後の部分から私たちの信仰姿勢を考えました。
❹ 10/11に、宮城教会（大原阿津子師）で次年度の「**3.11東日本大震災追悼記念会**」準備委員会が開かれました。準備の大詰めになってきて詳細な検討が続いております。必要な経費80万円が満たされるように覚えて下さい。
❺ 渡波キリスト教会の小澤倫平師の紹介で「**百万人の福音**」12月号の「**教会津々浦々**」欄に、この「石巻祈りの家」が紹介されることになりました。
❻ 大平英秀さん（故あつ子姉の御主人）が継続して礼拝に出席下さっています。神の導きをお祈り下さい。
❼ 10/14にメンターのSBS校長森谷正志師に礼拝・主晩の餐会記念愛餐会・十周年記念感謝会のご奉仕を頂きました。
❽ 10月も、この群の活動のために多く方より献金、献品、手紙、メイル、電話、訪問等で励ましをいただき感謝いたします。

■ 今月、次の課題を祈っていただければ幸いです。

① 今野かつ子さん/二平幸子さん/千葉真理子姉/Dei姉/岸浪市夫先生の回復/新井李恵子姉の治療のために。② 地域より求道者が起こされるように。③大平英秀さんのために　④西日本・北海道の被災者のために。⑤石巻地区の各教会の働きのために。

群の定期集会

・礼拝（毎週日曜日）	10：00-11：30
・祈り会（毎週水曜日）	10：00-11：30
・聖書を読む会(第1火曜日)	10：30-12：00
・ほっと・Time (第3火曜日)	10：30-12：00
・コーラス「花」（第2,4木曜日）	13：30-15：00
・楽しい手芸（第2,4月曜日）	10：00-12：00
・学習支援（地域の子どもの要望に応えて）	

信仰を詠う

11月　子供の風景と

ふりかえり 片手を挙げてランドセル
俄かに走り角まがりゆく

カバンより大きな顔の先生を
画用紙いっぱいに少年は描く

山間(やまあい)にソーラーパネルの数多(あまた)見ゆ
過疎なる村の希望のごとく

今 野 かつ子

毎日新一年生が通ってるのを楽しみに外を見ていた時の風景を詠んでみました。

● ＜祈りの要請＞「石巻祈りの家」は 満10年を迎えて、神の憐みと多くの教会・兄姉の祈りの支えに心から感謝しています。

10/14の「祈りの家」の開所十周年記念感謝会の様子と地区教会活動との関わり

10/14の「開所十周年記念感謝会」で森谷師の奨励・Dean師が支援活動を映像で紹介

交わり会では元仮設入居者からの感謝の証し

高橋　誠さんからの豪華な盛り花献品

「開所十周年記念感謝会」で市内の牧師、信徒50名余が出席して下さり楽しい感謝の時となりました

荒井キリストCの兄姉が応援に

Lindaさんの陰でのご奉仕に感謝

オアシス教会でのIMNの会議の様子

10/16教え子の葬儀前の御主人

10/16大学の同級生を鶴岡に訪問

10/14　メンターの森谷SBS校長が礼拝と主の晩餐愛餐会のご奉仕

アドナイ・イルエ

「アドナイ・イルエ」＝主の山に備え在り

信仰の歩みの中で

教え子の召天を通して

石巻祈りの家　　阿部　一

10/14午後に、石巻クリスチャン・センターで50名余の地域の牧師・信徒の出席を得て、私たちの群「石巻祈りの家」の開所十周年感謝会を開いていた最中に携帯電話が鳴った。酒田の女子高で担任した教え子の召天を伝える電話であった。

昭和47年、その女子高での2年目に2年生のクラスの担任になった。どんな子ども達と出会えるかと期待を持って最初のHRのために教室に入り、先ず簡単に自己紹介をしてから、出席簿を手にしながら点呼をした。最後の方のMの名前を呼んだが返事がなく欠席であることが分かった。始業式から欠席というのは珍しいことである。放課後に家に電話をしたら、市立病院に入院していることが分かった。

その日の夕方、病院に彼女を訪ね、医師に病気のことなどを伺った。当時、同病院に入院していた酒田西高出身のシャンソンふうの「夜明けの歌」や「希望」で有名になっていた歌手の岸 洋子と同じ「**膠原病**」という難病であった。医師からは、長くは生きられないこと、様々な病気が発症する可能性があり、結婚や子供を持つことが難しいと告げられた。

私たちにできることはないかと尋ねたら、「輸血」によることで少しは改善されるかも知れないということであった。そこで、早速、校長に実情を話し、全生徒の父兄へ協力依頼の文書を出し、同じ血液型で協力出来る同意した生徒をつれて毎週2人分の輸血をして頂いた。

そして、毎週病院を訪ねていたが、難病の彼女には「希望」が今最も求められていると考えた。そこで、毎週1冊、三浦綾子の小説を持っていった。そうしている内に彼女から聖書を読みたいとの申し出があった。

今回の葬儀で分かったことだが、その病院で働いていたクリスチャン介護士が彼女に大きな励ましを続けてくれたということであった。

翌年の昭和48年に、私は養父母から要請があった宮城県への転勤の道が突然開かれたため、彼女から離れることになった。その時彼女から復学の相談があった。彼女の体のことを考えると住んでいた地から汽車で通うことは、かなり負担が多いと判断して地元の高校への転入を勧めた。

その地元の高校に通いながら、彼女は教会に通い、信仰を告白して、その教会の兄弟姉妹との交わりを楽しんだ。彼女の病を知っていた私の元同僚が、卒業後にその高校の進路指導部の仕事を手伝いする道を開いてくれた。

神の憐れみの御手は彼女に伸ばされた。26歳の時に、彼女の病気を承知して、彼女と結婚したいという男性に巡り会わせてくださったのである。彼の生家は、酒田から遠い山に囲まれた農家である。彼は、自然に恵まれた山から春には蕨などの山菜を、秋には様々なキノコをを採り、その間の季節は自分が育てた野菜を加工して販売している。しかし、彼女は大きな病を抱えているから働きに出ることもできない。さらに年と共に彼女の病は増え、通院だけでなく、何度となく入退院を繰り返すことが続いた。彼のそのような自然に左右される仕事では収入もままならないことも多い。それ故に、彼らの生活は決して豊かな生活とは言えないし、むしろ、今の時代によくこのような家屋で生活していると思わせる極貧の生活である。

そんな貧しさの中で、彼らは親が育てられない他人の子供を預かり、大学まで進ませ、結婚をさせ、今年は初孫を見る幸せを経験した。

40代頃には病が酷くなり、病の数も増えて不安になり、週に2～3回夜中2時とか3時に電話を掛けてくる日が続いた。夫が何でもやってくれているといつも感謝し、自分が何もできないことを申し訳ないと悔やんでいた。先週、退院できて礼拝に出席出来たと聞いて喜んでいたが、しかし再度の入院中に急変し、神の許に帰った。

葬儀の際に、忙しい仕事で礼拝にでれない夫に「礼拝に出たい」といつもせがみ、礼拝に出た日は「嬉しい、有り難う」と繰り返していたと彼は証しした。彼の切々と語るその証しは、結婚の時に「**病めるときも‥**」と誓約したとおりに、その極貧というべき生活の中で、誠実に彼女に寄り添い続けてきた37年であった。私は、彼のその信仰の姿勢にキリストの姿を見た。この世では省みられなくても、まことに神に栄光を帰す歩みである。心から「本当に有り難う」を彼に伝えた。